

P-58

問診表からみた痤瘡と漢方治療の関係-特にマイナーな付随症状を中心に-

○豊本貴嗣¹⁾, 檜垣修一²⁾, 諸橋正昭²⁾

済生会高岡病院皮膚科¹⁾, 富山医科薬科大学皮膚科²⁾

＜目的＞ 漢方薬の痤瘡領域での臨床及び基礎研究は着実に進んでいる。特に、漢方薬の炎症性皮膚疹に対する臨床効果やP. acnesへの抗酵素活性や抗白血球遊走因子等がその代表と言える。痤瘡には自他覚症状等の随伴症状が多種存在することが有名であり、痤瘡患者もそれに悩まされる場合が多い。反面、随伴症状に対する研究志向は甚だ低いと言わざるを得ない。今回、問診表を使い、マイナー項目と思われるものを中心に漢方薬との関係を論じてみた。

＜方法＞最近4年間の間に済生会高岡病院皮膚科外来を受診した痤瘡患者を対象とした。漢方方剤は痤瘡患者の皮疹の状態を考慮して、当病院採用の清上防風湯、十味敗毒湯及び当帰芍薬散より選択した。投与期間は概ね12週間とし、主な併用薬は観察期間中は変更しないようにした。当科オリジナルの問診表を用い、付随症状の推移を検討した。今回、検討対象の付随症状として、下痢、頭痛、口唇の乾燥や吐き気等があげられる。

＜結果＞第16回の本学会での報告同様、漢方薬使用群が未使用群（西洋薬群）と比較して遜色ない臨床効果が得られた。下痢、頭痛及び身体のだるさも漢方薬使用群でより高い改善がみられた。十味敗毒湯は身体のだるさ、下痢、頭痛及び吐き気等に、清上防風湯は口唇の乾き等、更に当帰芍薬散は頭痛や吐き気等に各々臨床効果が高かった。又、臨床効果改善群が非改善群よりも肩こり、口唇の乾燥、身体のだるさ等多項目で、改善度を上回った。一方、漢方未使用群の付随症状の改善の悪さも目立った。

＜考案＞痤瘡患者における漢方薬の付随症状の効果検討は皆無に近い。あっても、のぼせ、便秘及び皮膚の荒れ等メジャー項目が主体である。今回、我々はマイナー項目である種々の付随症状を検討した。その結果、十味敗毒湯での柴胡による抗ストレス作用が身体のだるさを改善した等予想された結果の他、多数の新知見も得られた。漢方薬処方の際、皮疹のみならず、代表的な付随症状も種々加味すべきで、漢方薬の効果は付随症状と皮膚所見併せ総合的に判断すべきである。